

## 最新の情報と思考への誘い—高等教育番組の魅力

(平成2年度・大学放送公開講座番組を通覧して)

放送教育開発センター 制作部長 栗田博行

6月、当センターに着任して、しばらく放送大学の授業番組を視聴することに専心していた。そこへ平成3年度放送利用の大学公開講座企画連絡協議会に担務の一端が生じ、今度は大学公開講座番組を視聴しつづけることになった。ビデオ・音声カセットを取りよせての視聴なので本数がわかっており、テレビ32本、ラジオ20本であった。放送で視聴した放送大学授業番組の方はどのくらい見たのかわからないが、ともに45分(または30分)番組であることを考えるとハタ目には異常に映る程のテレビ漬けの時間を過したことになる。

「講座型教育番組はつまらない。魅力ある映像に乏しく、いつも講師の顔と話ばかり」といった批判が、知的・学術的領域を内容とする教育番組に対してよく繰り返されてきた。しかしその種の番組ばかりで“テレビ漬け”の時間を過ごしてみても、筆者にはそうは思えなかった。この種の番組群に特有の面白さというものが成立し始めていると感じた。その面白さを煎じつめると表題に掲げた言葉に結びつくような気がしている。

- ・最先端の現象と最新の知見が扱われていることが多く、見るもの(成人レベル)にとってもかく情報がある。

- ・いい番組の場合、腹に落ちてゆく論理的な思考過程を楽しみながらその情報が得られる。という印象である。実践15年余、このあたりに高等教育レベルの教育番組群の、一般向け教養番組とはまた別の特色が確立され始めているのではないだろうか。

以下そんな印象に結びつきたいいくつかの番組について感想を延べ文責を果したい。

### (1) 「食文化のあけぼの」—名古屋大学・名古屋テレビ放送

“食—人間生活とのかかわり” 第1回

・内容

人間にとって食は、食料の獲得手段、調理加工の方法、食事の形態、さらにそれらをめぐる精神的側面までも関係し、複雑多様である。それらのもっとも根源的な様相を、農耕牧畜以前の旧石器時代、縄文時代にさかのぼり、考古学を中心とする最近の研究成果にもとずいて考えてみる。

受講案内より

この“内容”を“番組のねらい”風に言いかえると、「日本人の食生活は、一般に思われている以上に、縄文時代にルーツがあることを視聴者に解らせた」ということであろう。このねらいはよく達成されており、視終ってこの点に関していくつもの「なるほど!」があった。

この種の番組づくりのスタンダードと言えるくらいオーソドックスな制作手法を重ねているが、その成功に到った背景を少し詳しく分析してみよう。

### A シリーズの大テーマに対する13回の章立ての的確さ

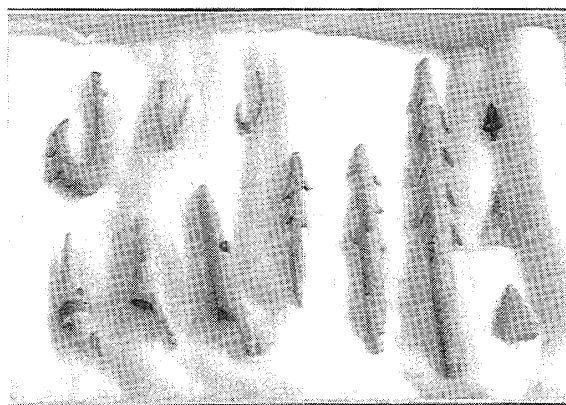
「食文化のあけぼの」は、シリーズの第1回であることから、冒頭にコールドオープニング（タイトル前のイントロ）を配して、各回のタイトルを紹介し、シリーズ全体のメッセージ（大テーマ）を語りかけている。よく採る手法だが、短時間のうちにスッキリとアピールしなければならないコールドオープニングの中で、全13回のタイトルと全体を通してのテーマを語ることが、気持ちよくキマっているのには、それなりのワケがある。

まず言えるのは、企画の最初に決まったであろう「食—人間生活とのかかわり」という茫漠たる大テーマを、具体化に向けて、しっかり分節化し了せていたということである。次いでそれに明瞭な名前（タイトル）を付し、順序性のもとに整理し、相互の連関性も把握できる13の章に組み終えていたことである。そこまで到達していたからこそ、各回のタイトルを紹介するだけで、このコールドオープニングの結びの「食は、いつの世も人間生活にとって根源的・総合的最重要問題。それを総合大学の利点を活かして多角的・全体的に追求してゆきたい」というメッセージが、言葉だけが空転するのではない、ピンと来る説得力を持ったのである。

大きなテーマをシリーズで追求してゆく知的・学術的番組では、このような“分節化・章立て”が制作開始前に明確に行われているかどうかという点に、成否の第1段階がかかる場合が多い。活字メディアでの表現作業も同様であろうが、作業がより一回性の中に拘束されやすく、かつ複数の人間の集団作業となるテレビの世界では、特に重要な点である。制作に関わる沢山の人間が、各回、各持ち場で自分が担当する部分を、全体の文脈の中で理解した上で共同作業を進める土台となるからである。それは、ゲストスピーカーの発言の仕方やカメラワークのひとつひとつ、フリップのデザインにまで反映してくる。

「食—人間生活とのかかわり」は極めて総合的なテーマである。それだけに学際的なアプローチが必須のものであるが、それをしっかり分節化し、シリーズ性の中に章立てしてゆく作業は、相当緻密で重厚な取り組みが必要であったろう。企画の初動の段階で、それをやり遂げる編集体制と熱意が学内に定着していることが想像されるコールドオープニングであった。

### B イントロにまず魅力的なものを配置



タイトル部分が終了すると、宮城県松島湾宮戸島の里浜貝塚の発掘現場のシーンが続く。主任講師の渡辺教授と発掘現場の研究者の会話などを通して、縄文人がすでにブリ・ウナギ・サバ・サメなどを釣って食に充てていたことなどがわかり、興味を惹き始める。そこでナレーションが「第1回の今日は、日本人の食生活のルーツとも言うべき、縄文時代の食のあり方をたづねよう」とこの導入部をしめくくる。

テレビ制作の世界では“番組が始まった2～3分以内に視聴者をキャッチせよ”といったことがよく言われる。講座型の番組はその点に鈍感な傾向があり、タイトル終了・講師のあいさつと言葉レベルの主題の説明が一種のステレオタイプとなっている。それでも興味を惹くものであれば良いのだが、そうっていないものが多い。その点この番組は、上記のようなイントロで視聴者の興味を導くことに成功している。

始まったらスグ、視聴者の興味を惹きつける強い素材を一このTV業界ドグマには視聴率対策という以上の意味があろう。造り手側からすれば表現すべき“漠然とした全体”の有効な切り口（話の起こし方）の把握につながり、これに成功すればそれ以後の素材・情報の提示の順序も、自らにとってスッキリとした納得のゆくものになりやすい。つまり、構成が見えてくる。受け手側にとっては、そのことにより生き活きとした関心が発生し、それ以後の素材・情報を、それをもとに積極的に待ち受ける姿勢がもたらされる。テレビという“一過性の時間の中のひとまとまりの情報の流れ”という表現の場では一般に大切なことだが、受け手＝学習者である教育番組においては特に強く意識されるべき点であろう。

この点に関して放送大学の授業番組に次のような例がある。エネルギー保存の法則を内容とする物理学の番組でのことである。タイトルが終って登場した講師は無言である。やおらゴルフボールを取り出し、掲げ、手放す。スタジオの床に落ち弾むゴルフボール。しばらくのその持続と弾みの収まり。一瞬の静止と静寂の後、講師が話し始める。「実はここにエネルギー保存の法則という今日のテーマが…」小さな工夫だが、このアイデアひとつで視聴する姿勢が一段ちがってくる。このオープニングに辿りつくまでに講師とディレクターは随分智恵をしばったそうである。

### C 「未知」と「知」・聞き手と講師のバランス ——

前述、里浜貝塚の現場映像が終るとスタジオへ。司会の成田さんが講師渡辺先生に発する第1の質問は

「先生、縄文時代といいますと、原始的なイメージが強く、私には狩をしてケモノの肉を食べていたのでは？という思いがあるのですが」

「日本の食のルーツというとお米を思う。それは弥生時代のものの筈？」  
というものであった。

とりたてて取り上げることもないくらいの、自然なごく当り前の質問に思えるが、実はここにもこの番組の成功のキポイントが潜んでいる。一般視聴者の漠然ともっている常識の位置・程度を測り、それがこれまでのシーンの情報の提示により多少ぐらつき始め、“いぶかしさ”という形で興味が生れ始めていることを見透した上での設問なのである。

ここでこの番組は、ターゲットとする「未知」のレベルをとらえ、司会者成田さんは視聴者（＝学習者）の代表というスタンスに立った。

これに対し渡辺先生は、学習者の知のレベルをよく把握した教師として、最近の考古学の知見などを引きながら「必ずしもそうでない」ことをていねいに的確に答えてゆく。ここに到って視聴者の中にすでに生じ始めていた「食」→「縄文の食」への興味・関心は、もう一步をすすめて今回の情報の流れを自らも積極的に追おうとする“主題意識”にまで焦点化されたと言

えよう。適切な設問を適切なタイミングに配置することの重要性を示している事例である。

以後、番組の主役・司会者と講師の関係は聞き手と答え手・学習者と教師の関係を兼ね、一般成人レベルの知的関心に応える安定感のある教育番組として、わかりやすく納得のゆく内容を実現していった。

司会・成田さんの発言は、いずれも自分の頭脳を潜った言葉として出てくる落ちつきや間合いが感じられ、教育・学習的番組の聞き手として適切であった。若い女性を登用した場合、パターンとなったハツラツとした態度が、視聴者の情報を追う思考の流れをかえって邪魔してしまうケースが見受けられるが、そういったことの無い好ましい自然さに充ちていた。

これに応える渡辺先生は、最新の考古学の研究成果を万全に体現された講師としてゆとりをもって篤実に対応される。その姿勢が、成田さんが代表をする“そのことに関して未知”なる視聴者のレベルに、いわばおだやかに背をかかめてのものであることに筆者は「教育」を感じ、共感を強くした。大学放送公開講座という事業が、各地の大学の学術・研究成果の披露公開であると同時に、地域の市民に対する「教育」の営みでもあることが、そこに端的にあらわれている気がしたのである。

さて、最後に担当ディレクターについて、企画連絡協議会の場で名古屋テレビ放送の出席者から「制作担当は、先生との打合せにはテキストを読まずに行くことに心懸けている」ということを聞いた。「未知」「いぶかしさ」「半わかり」といった状態が、しっかりした「知」に出会う時、何が新鮮な情報となり、どのように発見と納得の感覚やすじ道が得られるか……そのことを打ち合せの場で自らつかむために意図的にそうされたものであろう。教育番組の制作の出発点にそのような「未知」を置くことは、非常に大切である。番組のわかりやすさその他もろもろのことが、そこからもたらされる場合が多い。

#### D 思考の素材（映像）の準備が万全



全体を通して、この番組には考古学の発掘の成果が豊富に導入されていた。尖底土器、キャリパー土器、クルミ・どんぐりなどの食べかす、さらには実験考古学で再現した縄文の食物。また手元パネル、立ちパネル。竹藪を配したメインセット……講座番組には珍しいくらいスタジオの広さを存分に活用している。加えて現地ロケも手厚く行っており、VTR映像も豊富に使用されている。

画面づくりの手だては総合的に準備し尽されており、当然のことながら“映像の乏し”くない講座型教育番組になっている。

映像が豊かであることは、テレビ番組としてそれ自体大切であることは言うまでもないが、この種の領域の番組においては、それ以上に重要な意味がある。このことによって、テーマを追求する「思考」と「思考の素材」の間の小刻みで密度の濃い往復が実現し、実証的な論旨（思考過程）が生き活きと展開できるようになる、という点である。テレビの教育メディアと

しての特性は、とりわけその「実証的な思考過程を楽しく」ということにあり、教育番組における映像の使命は、特にその点にかかわっていると見えよう。

これを逆に見れば、教育番組における「映像」とは「思考の素材」であれば良い。と言うことである。一行の文字も、一枚の資料写真も、一個の石コロもそれに対して注がれる思考との関係で具体的な材料としての力を持っていれば、それは「映像」なのだ。教育番組においては“画像至上主義的映像主義”といった強迫観念にとらわれる必要はない。

但しそれは「思考の素材」をしっかり豊かに準備するという姿勢と一対でなければならない。「教育番組はつまらない。映像が乏しく……」といった批判は、「素材」ぬきの「思考」のみの番組に接して出てくる場合、一半以上の理があるのである。講師ひとりが黒板と白墨だけを道具に語りぬく、といったスタイルの番組の中にも、そんな批判を寄せつけない面白さを持ったものが、稀にはあるが無いわけではない。この場合は、講師の語りの中に「思考の素材」たる具体的イメージを生き活きと視聴者の中に喚起する力があるのである。その意味では、この場合「映像」豊かなのである。

「食文化のあけぼの」は本番収録作業までに、さまざまな手法を用いてこの「思考の素材」としての映像の準備を万全にし尽くしていた。そしてそれを提示してゆく手順を、よくプログラム（構成化）していた。これにより講師と司会が小刻みな問答として展開する思考活動は、ゆとりと安定の基盤を得た。その結果、自在に展開するトークの印象を保持しながら、きちんとテーマに沿って論旨が組み立ってゆく情報の流れ（＝番組内容）が実現したのである。

## (2) 「自然の復元力とその破綻」－東北大学・東北放送

“地球環境の危機－人類が生き残るために” 第14回

・内容

自然には復元力が備わっている。それによって、自然は絶えず変化しながら、ある範囲内に留まり続けている例が多くある。しかし、自然の復元力にも限界がある。そのとき、どのような事態が起きるであろうか。

受講案内より

シリーズテーマ「地球環境の危機……」、この回のテーマ「自然復元力…」ともに研究テーマとして新しく、前述した名古屋大学「食」のシリーズのように具体的な画面の材料を確保しにくい分野である。全18回の章立ての取り組みは相当徹底されたことは伺えるが、尚も番組は理論や考え方、仮説といったものが中心とならざるを得ない難しさを残している。この回にもそれは表れ、番組のつくりという点では講師のひとり語り中心、映像は極めて少なく、講座番組のステレオタイプといった感を否めない。

しかし、それにもかかわらず高等教育レベルの教育番組として、独特の面白さをこの番組は確保した。その理由について考えてみたい。

### A 常識と、それを更新する視点と ——

番組は上記「内容」の趣旨を講師竹内先生が型通り紹介して始まる。草食動物と肉食動物の

話題が続き、シマウマ・ライオンの資料写真が添えられたりする。ついで一定の範囲の草原の野ウサギと山猫の棲息数の相関関係の事例が導き出される。画面はシンプルこの上ない説明パネルで、結構永い時間がこれに充てられている。このあたりまでで、一視聴者としての筆者の関心は番組から離れかけた。卒直な所「画像も論旨も常識的…」という印象であった。



ところが、この「野うさぎと山猫」の事例から一枚の字幕と共に次の論旨が導き出された。「あるものの量の多少が極端なところまで行き着くと特別な状態が突然出現する。これを“非線形性”という…」—筆者の中にここで小さな「なるほど！」が生じた。最初の興味の発生である。自然の均衡状態→変化→復元力までのお話を既知感（常識の範囲内）とともに受け止めていた視聴者に、新しい視点が提示された

わけである。（未知の概念ながら即座にピンときたのは講師の話題の組み立て方の巧妙さによるが、この場合は視聴者が“非線形性”的な事象を目撃したり経験したりしていることの多い中年世代であることも関係していよう。情報とは、受け手側のレディネスによって情報になったりならなかったりする相対的なもの、ということのひとつのあらわれと言えようか…）これによって、続く「絶滅」「カオス」状態の出現等は興味深く追うことができた。

ついで講師の話はこの番組の本題とも言うべき地球大気中のCO<sub>2</sub>の問題に移る。その最初の事例が、植物のCO<sub>2</sub>吸収の働きであったため、筆者の興味はまた後退しかけた。（既知感）エアショットによる森林の映像が添えられたりもするが特に気持は動かない。

ところが筆者はふたたび新しい興味をこの話題の末尾で与えられる。講師の話が次の論旨に及んだのである。「確かに植物が多ければ、それだけCO<sub>2</sub>は沢山吸収される。しかしそれは、大気中にCO<sub>2</sub>が増えれば自動的にそれだけ吸収する、ということにならない。その作用を支える光の量が地球上では一定である以上……」

「では、地球規模のCO<sub>2</sub>増加の問題はどうなる？」という疑問がすぐ浮んだことを覚えている。これによって、一視聴者としての筆者はこの番組を最後まで視聴しようとする“主題意識”を掴んだ（与えられた）ことになろう。

このことといい先の“非線形性”といい、「思考」とその対象たる「素材」という分け方からすれば「思考」の側に属する「視点」とか「問題意識」とか呼ばれるものである。番組の魅力とは、そのような新しい「視点」とか最新の「問題意識」を与えられることによることも多いのである。必ずしも「映像」ばかりとは限らない。

以後この関心に支えられて、ふたたびシンプルこの上ない説明用パネルによる「海水のCO<sub>2</sub>吸収力の大きさ」「さらに大きい陸、地中のCO<sub>2</sub>含有量」という話の展開を、一々興味深く聞いた。筆者にとってはすべて新しい情報であった。おそらくこれがこの番組に対する平均的視聴者像であったのではないだろうか。

## B 石ころ1個の大きな映像効果

講師ひとりの淡々としたお話で展開しながらも以上のような面白さで中盤を終えた番組は、さらに興味をかき立てるヤマ場を迎えた。「地中のCO<sub>2</sub>含有量の圧倒的な大きさ」の話題が、「ある種の岩石は風化する時、大気中のCO<sub>2</sub>を大量に吸収するらしい」と発展したのである。CO<sub>2</sub>問題の解決の道は？と心配まじりの関心で視聴してきた者にとって、「?!」と強い興味が生じた所である。



ここで映像の少なかったこの番組に、決定的な印象を残す映像が挿入される。北上山系のものという石灰岩とアルプスで採れるという「ドロマイト」という岩石である。画像としては平凡な白い石ころにすぎない。しかしその「ドロマイト」は、講師のお話ではCO<sub>2</sub>の含有率は48%に達し、手のひらに乗る100グラムほどのかけらで「6畳の間、5～6室分の大気中のCO<sub>2</sub>を吸収する」という。白いドロマイトのかけら

のスチール写真に、自然の摂理の玄妙さが象徴されているように感じられた。平凡な石のかけらの画像が、言葉による情報と一対となって、この番組の最も「映像」的魅力に富んだ瞬間を造り出したと言えよう。

これが仮りに百科辞典を引くことによって知り、見たのであったとすると、筆者のこの感銘は生じ無かったであろう。「地球環境の危機」→「自然復元力とその破綻」→「必ずしも植物が解決し切れるものではないCO<sub>2</sub>問題」というテーマの展開（関心の流れ）の中でこそ、この画面と情報は、力を持ったのである。「映像」の魅力が、文脈の中で生まれることを示す一例と言えよう。

協議会の場で東北放送・担当ディレクターより「理論的な世界。映像は極力使わないこととした」旨の発言があった。この番組の淡々とした印象のともなう展開は、意識化された手法の選択でもあったことを物語っている。そのような抑制によって、かえって「映像」的魅力が作り出せる所に、教育番組のひとつの特性があるとも言えよう。

尚、番組はこの「ドロマイト」のような現象が、この100年単位の地球上のCO<sub>2</sub>急増問題の特効薬を意味しないことを告げて結論となった。岩石風化によるCO<sub>2</sub>の吸収は、万年億年レベルのタイムスケールの対象であるらしい。「地球規模のCO<sub>2</sub>急増問題の解決の道は？」という関心で、番組の流れを追ってきたものとして、一瞬はぐらかされた思いが生じた。しかし、結局は、CO<sub>2</sub>問題の時間的量的スケールの錯綜する複雑さへの重い印象が残った。科学知識の乏しい筆者にとって、それは重要な新情報であった。市民向け教育番組として番組は成功したのである。

(3) 「千年を支える」～高岡短期大学・北日本放送

“木からのメッセージ” 第4回～

・内容

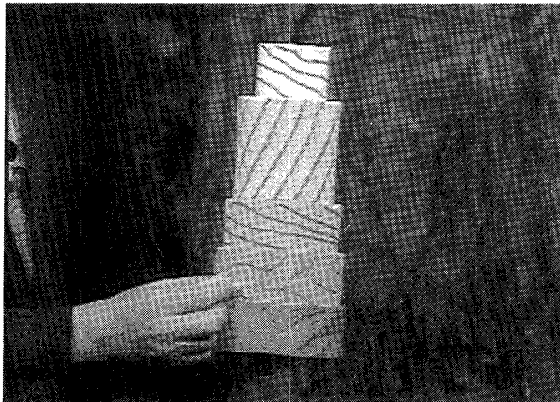
法隆寺を思い浮かべる人が多いだろう。木造建築が木の特性をうまく生かして外力に抵抗する構造を造っていることを、木材・構造・工法の側面から解明する。

受講案内より

法隆寺は出てこない。代わりに番組のラストに大分県の「小国ドーム」が紹介される。それは過去千年に亘って形造られてきた日本の木の文化が、未来に向けて発するメッセージを湛えているような魅力的な木造建築物である。

番組は、講師のひとり語りで展開するが、徹底した現地・現物主義の手法を採っており今回通覧した中で異色のものである。しかしそこからやはり教育番組ならではの醍醐味もたらされており、そのことに目を向けて考えてみたい。

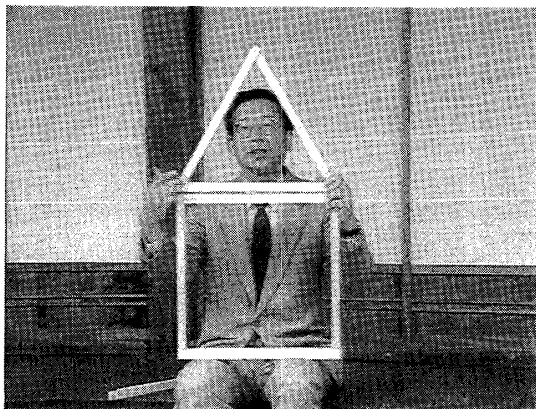
A 論理構造を立体模型で提示



番組冒頭部、一本の樹木のかたわらに立った講師の秦先生は「木の細胞模型」を持ち出し、木材の構造材の柱としての秀れた特質を細胞レベルで説明。細胞の構造に中空があること、セルロースの束が幾重にも重なってラセン型を形成していることなどから、木材が「軽くて強い」ことを押さえる。そして、日本の木造建築技術が木材のそのような特質をどう活かし、節などによる繊維の乱れや長さの限界などによる弱点

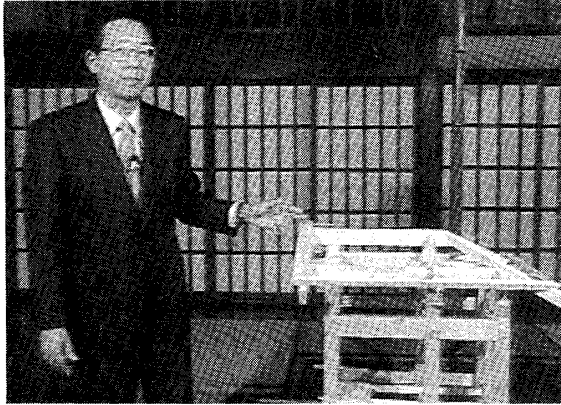
をどう克服しているかを見ていこうと語りかける。それがこれ以後の講師の各地散策の動機となっている。

これを受けてシーンは富山県五箇山にある有名な合掌造り、岩瀬家へ。外観のスケッチの後、



その縁側に腰かけて講師は木の枠組みをもとに合掌造りの構造を説明する。上部に三角形、下部に四角形。三角形の安定に対し四角形の不安定。そこで安定を確保するために部材の接合部のあり方に目が向けられ「接合を制するものは構造を制する」と、継ぎ手、仕口（接合方）の重要性が指摘される。そこで「どうなっているかを実際に見てみよう」と講師は岩瀬家の内部へ。このあたり「起」と「承」の関係が小気味よく決まっている。





岩瀬家内部の見学が終るともう一度立体模型が登場する。伝統的軸組工法の基本構造の模型。白木できていて、相当に精緻で重厚なものである。これをもとに土台、柱、桁、棟木、梁、鴨居などが形づくる構造が紹介され、軸の組み方によって働く外力に対する接合の工夫が施されていることが説明される。

以上三つの立体模型により、視聴者は釘ひとつ使わない木造建築物の成り立ちの論理構造を簡明に分りやすく与えられたこちよさを持った筈である。模型が体現して居なければならない論理性が十全で、工作物としても良い出来であることの両面から生まれた好印象である。

教育番組には、事象を成り立たせている“原理・法則”、それを見極めてゆくための“仮説・理論・視点”といったものを視聴者に提示する必要がある。大抵の場合それは説明用パネルやCG映像が使用される。この番組はそれを一貫して立体模型で提示し通した。木造建築物を対象とした番組であったことにもよるが、番組の構成が相当早くから見えてなければ、工作物の発注が出来ない。この点相当に手厚い制作への姿勢があったことが推察される。

木造建築物の論理構造は、それ自体は説明用パネルやCG映像で十分に提示可能である。しかしそれではこのように木の材質感、重量、厚み、それら組み合わさっての立体的な印象は伝わらない。この番組の立体模型による提示はその点で映像と情報と、情趣の豊かさを番組にもたらしめている。

さらに重要なのは、これによってこの番組の“現地に立ち、事に応じ物に触れての論考の旅”という基本スタイルが成立したことである。立体模型は、あらかじめ用意されていた人工物という点では説明パネルやCG映像と同じだが、現地主義の番組の流れの中に導入されて異和感を感じさせなかった。第1にはパネルやCGと違ってそれが立体物であることによるが、それを持ち出す場所やタイミングの設定の適切さもこれによっている。イントロの樹木のかたわらに立っての「木の細胞模型」。ついで合掌造りの民家の縁先での木組みの「構造模型」。すみずみまで配慮の行き届いた演出により、番組の基本スタイルが自然で統一感のあるものとなった。

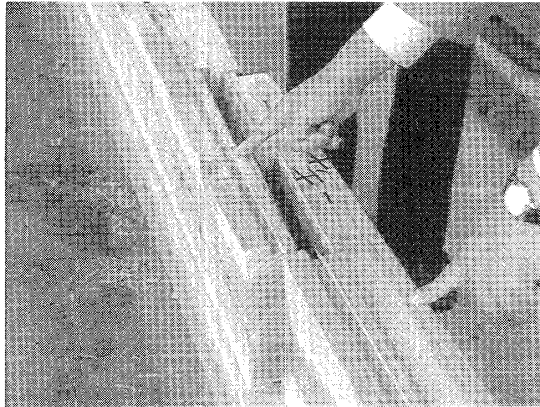
## B 映像と思考の同時進行

以上のように立体模型を活用して「木の材質と軸組工法と木造構造物のあり方」という、木造建築物を見る視点と論理を視聴者に提示し切った後、カメラは講師とともにさらにいくつかの現地に立つ。伝統工法を守る工務店。新潟北方文化博物館の豪農の館。そして熊本県小国の小国ドーム。この徹底した“現地、現物、論考の旅”の番組スタイルはどんな効果を生んだのか。一般番組ではよく採られる紀行スタイルだが、教育番組としてどのような意味を持っているのか、それについて考えてみたい。

工務店のシーン。直前の「伝統的軸組工法」の模型により提示された視点「木の接合部に働く外力に対する工夫」を実際に見てみよう、というのがここを訪れる動機である。講師と店主の会話により、伝統工法の接合方法が、用途に応じたバラエティに富み、材質に応じた継ぎ方

を持っていることが、新しい視点として付加される。

その上で足元の、切り込みが完了し接合を持つばかりの継ぎ手が紹介される。その様々な切り口が横ブレ、引っ張り、曲げ、折りなどの外力にひとつひとつ対応することが指摘される。その上で2本の材木が実際に継ぎ合わされるシーンとなる。槌音とともに数本のカンヌキが打



ち込まれてゆく。カンヌキの貫入とともに引き締め、組み合わさってゆく切り口。最後の一本が柔らかく打ち込まれた瞬間、カメラはピッタリと密着し切った切り口の見えるか見えないかの線にパーン、部材の長さの限界を越えた堅牢な一本の桁の実現を伝える。

講師と店主はこの間無言、画と音のみの提示である。このノーコメントの映像の流れを、視聴者はそれまでにこの番組が提示した、「接合」

をめぐる様々な視点とともに見守り、それが事物を成り立たせる原理として具体的に作用していることを感じ、考えていた筈である。この番組の映像的魅力に富んだ瞬間のひとつであった。

このように、この番組が採用した紀行スタイルの手法では、訪れた場所には、必ずそれまでに提示した視点の対象たる実在物がある、そこに立つことによって講師は「これ」「それ」「あちらの」と、その立った位置から指し示し得る具体物に即して論考を繰りひろげることになる。それは視聴者に対して、(講師の視野と同様に)映像により提供可能となる。一方その場に無いもの、資料映像や書物からの引用は逆にしづらくなる。紀行のスタイルが崩れてしまうためである。番組スタイルの選択によって、思考の枠組みの設定、範囲の限定の明示が行われたことになる。

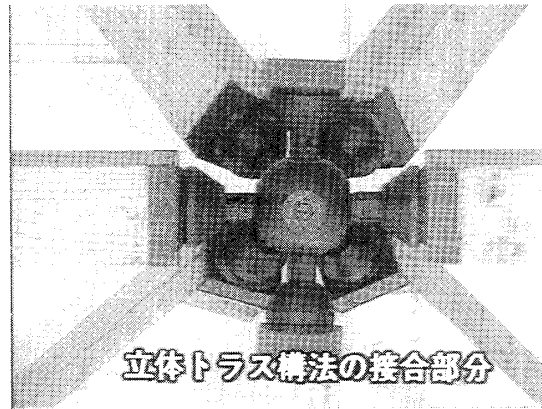
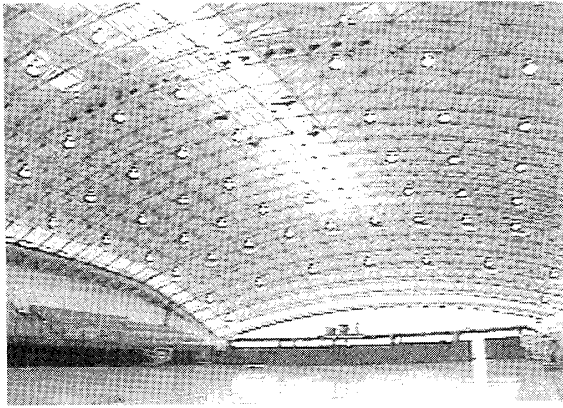
これにより、視聴者は論考を展開する講師の立場に極めて近くなる。明示されている思考の枠組み、講師と同様に提供されている思考の素材。そこから視聴者自身の思考が始まる。

それまでに与えられた観点を中心に、自らの先行知識や経験をも動員して、画面の流れを同時的に追い始めるのである。講師とともに映像で提示される事物への感興を抱き、時には講師のコメントが無くても自らの感想や考えを内言する。映像と思考の同時進行が始まったのである。

この過程は、次々と呈示されて来る情報を理解・納得している受動的な視聴心理に一見似ているが、実はもう一步積極的に「主体的に思考し学習している」視聴心理と言えるのではないだろうか。この番組の“紀行スタイル”という手法の選択は、そのキメ細かな映像提示と講師のおだやかな話法と相まって、そのような教育番組としての特質を随所に実現した。

### C 主題のくりかえしと発展

番組の最後に、日本建築学会賞を受賞した木造建築物、大分県の「小国ドーム」が紹介される。3000平米、高さ18メートルの大空間が、立体トラスという三角形の構造物をつなぎ合わせるにより造り出されている。その立体トラスは間伐材クラスの木材の組み合わせで出来ている。



木の軸方向に強く軽い材質が、三角型の軸方向にだけ力を伝達する構造によって活かされ、大きな外力に抵抗し得る安定した大構造物を実現しているのである。コンピューター時代の高度な設計計算技術と接合部を支えるハイテクがこれを可能としたという。大きな樹木を加工して巨大な建築物を造ることが不可能な時代にあって、これは木造建築の未来をさし示している。伝統的な木の利用の智恵の、新たな到達点と言えよう。

そんな論旨とともに豊かな映像を楽しんでいるうちに、筆者はこの番組の構成手法のもうひとつの特質に気付かされた。主題のリフレインである。

この、木からのメッセージ「千年を支える」の主題は、番組の前半部で立体模型を活用して明快に提示された。木の建築物構造材としての軽くて強い材質。それを軸組した構造物の形態の特質。その両方に対応する接合の工夫。それが実在の建築物の中にかに活かしているかを見ることであった。番組の中盤にかけて、それはいくつかのシーンで提示される具体物に即して、アクセントを置き換えながらではあるが、繰り返し追求されてきた。ところがそれは、これまで見てきたものとは全く別の「小国ドーム」のシーンでも、二度三度繰り返されるのである。木の材質、構造の形態、接合のあり方。そのリフレインの中で、これらの主題は、新しい具体的な形となって現れ、新しい意味を視る者に問いかける。小国ドームという好素材を得て、主題を新次元（新しい木造建築物の世界）に鮮かに発展させているのである。

教育番組において、繰り返しは知識や思考方法の定着と発展という点で大切なことであろう。そのすっきりとした高度な在り方を見た思いがした。音楽における対位法になぞらえたいくなるような魅力を持った構成法であった。

以上述べて来て、番組の魅力というものにはケースバイケース、まことに千変万化と言はざるを得ない。ただ、この三番組を結んだ範囲の中に、最初に述べたような「最新の情報があり、かつそれが思考過程に誘いこむような述べ方の中で提示される」という高等教育レベルの教育番組群ならではの魅力が誕生してきている、と感じる次第である。もちろん、そうした魅力を生み出す根本が、出演講師の“研究の厚み”であり、それに根ざす“伝えたい情熱”であることは言を待たない。